

争論 文化事業、助成か自立か

補助金から自立へ

苦闘する日本センチュリー交響楽団

望月 正樹

((公財) 日本センチュリー交響楽団楽団長)
<聞き手>杉本貴志 (関西大学教授、本誌編集長)



センチュリー交響楽団の歩み

Q 大阪府が設置する公営のオーケストラとして 1989 年に誕生した大阪センチュリー交響楽団が、現在は大阪市長を務めている前知事の就任によって、その運営を見直され、「公営から民営へ」と転換を余儀なくされたことは大きな議論を巻き起こしました。財政危機の大阪府には文化の支援などする余裕はないし、本当に必要なものならば利用者から支持されて自立できるはずだとして、児童文学館や古典芸能団体などとともにオーケストラへの補助が削減され、打ち切られます。これを機に、大阪府民のみならず全国の人々から、芸術・文化と行政・政治・社会との関係について、さまざまな意見が表明されたわけですが、中には単純に、大阪に公営の楽団を新たにつくる必要など元々なかったんだから、この際、廃止してしまえばよい、というような意見も見られました。しかし実はセンチュリーの歴史は、敗戦後にまでさかのぼることができるようですね。

【望月】センチュリー設立の経緯を知っていただくために、前身の「大阪府音楽団」という吹奏楽団の紹介から始めたいと思います。

大阪府音楽団は 1952 年に都道府県立としては国内唯一のプロ吹奏楽団として大阪府により設立されました。楽団員は 30 数

名程度で大阪府の職員（公務員）であり、演奏を仕事としていました。設立当時はまだ戦争の傷跡が残っている時代で、府民への行政 P R や情操の涵養を目的として活動を行っていましたが、世の中が平和で豊かになるにつれ、マーチングや P R 主体の活動から、コンサートバンドへとシフトしていきました。

しかし、年数回の主催公演のほかは、150 回を超える音楽教室が主な活動であるという現実と、優れた演奏をホールで鑑賞してもらうプロ演奏団体としての活動目的が合わなくなってきたのと同時に、府民の音楽への要望がより高度で多彩なものへ、例えばベートーヴェンやモーツァルトを聴きたい、オペラやバレエの鑑賞もしたい…と変化し、吹奏楽では対応しきれなくなってきました。また、国際都市・大阪の文化の一つの顔としてのオーケストラを作ってほしいという要望も高まり、好景気で税収が豊かだったこともあり、当時既に大阪府内には 3 つのプロ・オーケストラが存在しておりましたが、この大阪府音楽団を「発展的に解消」と称し、大阪府主導の新しいプロ・オーケストラが作られることになりました。

大阪 4 番目のオーケストラとして誕生するにあたり、既存のオーケストラからは民業の圧迫だと反対され、積極的な営業活動はせずに公益的な活動に重点を置くことを条件に認められたようです。この約束は、

財団の見直しまでの長期にわたり、しっかりと守り続けられます。

新しいオーケストラの管楽器奏者には大阪府音楽団のメンバーをそのまま横滑りさせるのではなく、広く優秀な演奏家を募るため、大阪府音楽団のメンバーも含めて改めてオーディションが開催されました。こうして、大阪府音楽団の実績を継承するかたちで平成元年に大阪センチュリー交響楽団が誕生しました。ここで大きく違うのは、大阪府音楽団時代の大阪府による直営方式から大阪府文化振興財団の事業という運営方式に改められたことです。すなわち、オーケストラのメンバーが府職員（公務員）ではなくなりました。また、設立当初は、ワッハ上方、現代美術センターなどもセンチュリーとともに財団の事業として運営していました。

財政危機の中で

Q ところが、まもなく地方財政の危機が叫ばれるようになり、とくに大阪のそれはひどいということで、補助金政策の見直しが始まります。

【望月】 文化振興財団設立に向けて、大阪府は基金の利息収入だけで運営していけるようにと100億円の基金を拠出しました。最初は順風満帆な船出に見えましたが、数年後にはバブル崩壊、利息低下により基金を食い潰す状況に陥ってしまい、同時に大阪府の財政悪化も深刻化し、学校公演や府の文化事業などにも少しずつ影響が出始めました。

そこで2002年4月、大阪府文化振興財団は、あり方や事業内容を見直し、大阪センチュリー交響楽団の運営を主な事業とす

る団体となり、理事長に出馬迪男氏（当時関西テレビ社長）が就任し、運営体制が変わるとともに、財団事務所を服部緑地（センチュリーオーケストラハウス）に移転しました。ワッハ上方や現代美術センターの運営が離れ、センチュリー交響楽団の運営のみの財団になったのです。当時の大阪府からの説明は、「財団に民間的発想を取り入れ、積極的な活動を展開していく」というものだったと記憶しています。この頃には子供のための文化予算は激減し、生の音に触れる機会はほとんどない状態でした。このような状況を少しでも改善出来ればとの思いから、2003年に体験型の音楽教室「タッチ・ジ・オーケストラ」を開始しました。続いて2004年には特別支援学校コンサート（フルオーケストラ）・府立病院コンサート（室内楽）を開始、府の財団だからこそやるべきは教育・福祉プログラムと捉え、積極的に取り組み始めました。

継続して教育・福祉プログラムに取り組んでいることは、府庁内でも一定の評価を受けていましたが、その一方で基金はどんどん目減りしていき、補助金を一般財源からの拠出に変える議論が太田知事の任期最後の頃に出始めていました。不況が長期化する中で基金はどんどん減り続け、2010年度には底をつくと思算されるところまで来ていたのです。その直後、2008年2月に橋下知事が就任し、打ち出されたのが「大阪府財政再建プログラム」です。

センチュリーの民営化

Q 前知事の就任によって一気に問題は急展開、民営化となったわけですが、これは要するに、「楽団用としていた基本財産を与えるから、今後はこれを使ってやり繰り

しなさい。もう今後は一切補助金は出さないよ」と府に言われた、と理解すればいいでしょう。

【望月】 橋下知事になってすぐに財政再建プログラムプロジェクト・チーム案が打ち出され、一般財源の話が白紙になるどころか、補助金廃止の危機に直面します。2008 年 4 月、「センチュリーを応援する会」が発足し、日本全国で署名活動が行われ、2 ヶ月半で 10 万名を超える署名を知事に提出することができました。また、秋には貝塚・豊中・松原の 3 カ所でワンコインコンサートを開催、会場では寄付を募りながらセンチュリーの存続を訴えました。7 月に発足したファンクラブの会員数は 5 ヶ月間で 4800 名になり、センチュリー存続の気運が高まる中、翌年 3 月には応援する会主催の「がんばれセンチュリーコンサート」が開催されました。チケットは完売、指揮者・ソリスト・全国のオーケストラプレイヤーすべてがボランティアで参加してくださいました。

このようにセンチュリーを応援して下さった皆さんのお陰で、次年度も補助金が拠出されることになりましたが、金額は前年度の 4 分の 1。当然その補助金だけで楽団の運営が出来るはずなく、当初予定していた 20 周年記念事業を急遽取り止め、その資金を運営費に充てることにしました。この資金が無ければ、センチュリーは日本センチュリーに改名する前に解散していたでしょう。

事業資金は 2 年で底をつくことが分かっていたので、4 分の 1 の助成金で出来る超縮小路線か、自立して民間の支援を求めるかを早急に決断しなければなりませんでした。「何とか民間スポンサー獲得を」と動き始めたのですが成果は出ませんでした。このような状況のなか、水野武夫現理

事長と橋下知事の間で何回かに及ぶ会談が行われ、これまでの府民事業を継続することを条件に、財団の基本財産を引き継ぎ「自立」することが決定しました。翌 2011 年 4 月、新公益法人制度のもと、公益財団法人への移行が認定され、公益財団法人日本センチュリー交響楽団が新たにスタートしました。「とりあえず基本財産をあなたたちに委ねるので、それをもとに健全な経営が自分たちでできるように頑張ってください。ただし、基本財産を委ねる代わりに、いままで大阪府下で継続していた府民への貢献的な事業に関しては継続してください」ということです。

Q 「民営化」されたセンチュリー交響楽団は、第 1 バイオリンが 10 名、フルートやオーボエ、クラリネット、ファゴットといった木管楽器が 2 名ずつという「10 型 2 管編成」で総勢 50 名ちょっとの楽団ですが、これは現代のオーケストラとしては小さなオーケストラですね。管楽器が 3 名ずつの「3 管編成」で総勢 100 名近くを抱えるオーケストラが多いなかで未だに「2 管編成」であるというのは、財政上の制約が大きいということでしょうか。

【望月】 大阪フィルハーモニー交響楽団は「4 管」、京都市交響楽団は「3 管」を謳っています。それによって管楽器の基本編成が変わり、楽団のメンバーとして所属する人数、規模が決まります。うちの場合は 10 型の「2 管」と謳っているのですが、その人数しかいませんが、京響さんは「3 管」ですから、管楽器で 3 人ずつぐらいはメンバーとしているわけです。センチュリーを発足させたとき、「10 型 2 管で始めるけれども、ゆくゆくはオーケストラのいろいろな可能性を広げていく意味でも編成を少しずつ大

きくしていく」というようなイメージをもっていて、そのまま現在に至っているわけですが、お金がなくなって、いまはそれができるような状況ではないので、編成に関しては、12 型 3 管はできるわけもなく、10 型 2 管を維持していくことになります。

10 型 2 管の編成でやれる曲はすごく限られていて、大編成の曲には手が出せないのです、お客さんにもやれる範囲の曲で楽しんでいただかなければいけない。そうすると、レパートリーがすごく狭まってくるので、たまには大きな編成のものを、エキストラの方にお手伝いいただきながら何回か演奏する。そういうことをしながら、少しずつ幅が広がるような取り組みをしています。

なぜ赤字なのか

Q そうはいっても、一応相当な金額を府から移管してもらったわけで、その基本財産があるのだから、あとは自主努力で高望みをせず、赤字を出さないように毎年堅実に運営していけばいいじゃないか、そこにさらに公的補助だとか寄付金だとかを求めるなんて図々しくないか、という意見をもつ府民も当然出てくると思います。しかし実際には、基本財産を毎年相当取り崩して運営せざるを得ない（このままでは数年後に財政的に行き詰まる可能性がある）という状態だと聞いています。なぜ、そうなるのでしょうか。

【望月】 プレーヤーはもちろん、事務局員も含めて、他の仕事との掛け持ちではなく職業としてオーケストラをやっているのです、彼らに給料を払わねばなりません。その給料を、月に何回かある演奏会の収益から払うことができないのです。定期演奏会

ひとつ考えても、指揮者やソリストの出演料、ホールの貸料、広報宣伝費などでほとんど消えてしまい、楽団員の人件費までは収益としてなかなか上がらないのが現状です。ですから、現在の収支構造では、ほとんどタダ働きみたいになる。主催公演のときは、だいたいそうです。

Q 定期演奏会というのは、月に 1 回、オーケストラが自分たちの演奏、鍛錬の成果を披露する場で、これがいわばオーケストラの真剣勝負であり、その楽団の評価を決めるものですね。センチュリーなど府内のオーケストラは、大阪の福島にある「ザ・シンフォニーホール」というクラシック音楽専用のホールを会場としています。

【望月】 あそこは、補助席を入れて 1800 席ですが、普通にお座りいただくのであれば 1700 席です。一方、オーケストラは最低でも 50 ～ 60 人の人数が一カ所に集まって音を出します。60 人がいっぺんに集まって音を出すものが他にあるのか、ということだと思うんです。収支構造で考えても、これでペイすることはまず難しい。それが現状です。

Q 阪神タイガースならば、甲子園球場で 5 万人を集めて、主催ゲームを年に 70 回以上開催できる。またポピュラー音楽の多くでも、演奏者はオーケストラよりもかなり少なく、逆にお客さんは、マイクとスピーカーで音響を整えることが出来るから巨大な会場も使えて、ずっと多い。それに対して、生の音が絶対のクラシック音楽では、たとえ満員のお客さんを集めたとしても、月に 1 回の定期公演で 2000 人にもならない、ということですね。だからウィーン・フィルやベルリン・フィルの日本公演

だと 3 万円とか 4 万円といった高額の入場料金が設定されるのだと思いますが、日本のオーケストラの公演はそんな料金ではありませんね。

【望月】 経費をすべてチケットの売上代で賄うとすれば、それなりの料金設定にしなければなりません。そうすると 1 万円をゆうに超えてしまいます。それだけのお金を出して、はたしてどれだけの方がクラシックの演奏会を聴きに来てくださるのか。おそらく、そうそうは来られなくなるでしょう。ですから、「これぐらいの金額設定なら、月に 1 度の楽しみに聴きに行こうという気になっていただける額だろう」といったバランスをある程度考えなければいけなくなるわけです。それで 5000 円とか 6000 円といった金額の設定になると、結局は、公演で自分たちの給料分まで稼げる構造にならない、というのが現状です。

楽団員の待遇

Q センチュリーの定期公演なら、いちばん高い A 席が 6000 円ですが、B 席で 4500 円、C 席で 3000 円、D 席だと 1000 円ということです。他のジャンルの音楽や、文化・芸能・スポーツ関係の入場料と比べても、決して高いとは言えないと思います。つまりクラシック音楽＝お金持ちにしか縁がない趣味というのは誤解だと思いますが、しかし、プロの音楽家になるためには、才能と努力のほかに、かなりの経済的な出費が必要だということも事実で、バイオリンの名器がいくらだとか、レッスン料にこれくらいかかるとか、音楽大学の学費は他大学よりも相当高いとか、そういう話ばかり伝わってくると、その元を取るためにも、演

奏家というのは相当高収入のはずだ、みたいに考えてしまいがちです。

【望月】 楽団によって給料も違います。たしかに「いい給料だね」という楽団もありますが、「それは大変だ」というような金額の楽団もあります。その意味では、かなりの幅があると思いますが、センチュリー交響楽団はそもそも大阪府が立ち上げたオーケストラですから、最初の給与形態は、基本的には府の職員の人たちの給与ベースにならうかたちでつくられていました。ですが、その後、税収もだんだん減り、基金も枯渇し始めて、だんだん大阪府の職員の方々との開きができたというか、その金額に届かない給与額でずっと来ていた経緯があります。もちろん、いまは給与体系はまったく違って、楽団独自のいわゆる年齢給の給与表みたいなものをつくり、それに則ったかたちでやっていますが、とても大阪府の職員の方々と同じだけの給与なんてもらえるような状況ではありません。

これはあくまでセンチュリーの話でして、一概に「オーケストラの給料はみんな低い」とも言い切れない部分もありますが、少なくともセンチュリーの現状では、そこまでいい給料ではないということです。でも、給与所得としてはセンチュリーよりもっと低い交響楽団さんもあるので、うただけがどん底という話ではなくて、それだけ幅があって、センチュリーは「真ん中よりも少し下」くらいの状況だと思います。

Q 日本オーケストラ連盟の正会員となっているオーケストラは全国で 24 楽団あります。これが、音楽家の道を志してきた人たちの中で、最も優秀で、プロの音楽家になることに成功した人たちの勤め先ですから、野球でいえばセ・パ両リーグとか、サッ

カーのJリーグにあたるものでしょう。野球やサッカーだと最低年俸保証が400～500万円くらいだそうです、クラシック音楽だと、これが年収の平均値くらいで、それよりも下という音楽家もたくさんいるということです。現実には2軍選手を含めたタイガースの支配下全選手の平均年俸が6000万弱ですから、ひと桁違うどころか、10分の1にも及びません。現役を続けられる期間の違い等々ありますから運動選手と単純に比較はできませんが、おそらく音楽の道では相当な成功者といえる人であっても、平均的なサラリーマンや公務員の年収には及ばない例が多いということです。それをどう評価するかは人それぞれでしょうが、「贅沢な給料を払っているから赤字だ」という状況では全くないということは押さえておく必要があると思います。

【望月】 たとえばバイオリンで1億円を超えるような、名器と言われる楽器で演奏している方は、オーケストラではほとんどいません。オーケストラの楽団員ではなく、単独で演奏活動をするソリストの方で、そういう方はいらっしゃるんですが、それでもご自身で買われることは稀でして、ほとんどは大きな会社や大きなお金を持っていらっしゃる個人の方がその人に貸与するというかたちです。コレクターとして名器を持っていらっしゃる方が、「彼（あるいは彼女）は素晴らしいバイオリニストなので、ぜひ、この楽器を弾いて、もっといい演奏をしてくれ」ということで、その楽器を貸与しているというのが、ほとんどのケースです。

また、公立の音楽大学はあまりお金がかかりませんが、たしかに私立の音楽大学はけっこうなお金がかかります。大学に入るまでも、先生にレッスンを受けに通ったりして、すごく費用がかかりますし、入学

してからも、ピアニストを志す人であれば、防音仕様の部屋にして、なおかつそこにピアノを入れて、毎日練習できるような環境を整えて…となると、すごくお金がかかりますし、環境を整えるのが大変です。

ところが音楽大学を出たからといって、それに見合うだけの収入を得られるわけではない。そういう出演料をもらえるような人は氷山の一角です。仮に管楽器で日本のトップクラスの一人、ソリストになったとしても、とても野球選手のような年間1億円云々の収入にはなりません。

オーケストラの各種公演

Q そしてソリストではないオーケストラの楽団員の場合は、プロの音楽家といっても給与はサラリーマンにもはるかに及ばないということですが、しかしそれなら、月に1度の定期演奏会だけでなく、もっとお客さんを集める場をたくさんつくればいいではないかという意見も当然出てくると思います。定期演奏会以外に、収益改善に役立つ事業としてはどのようなものがありますか。

【望月】 オーケストラの場合、大きく分けて2種類ありまして、ひとつが主催公演、つまり楽団が自主的にやっているものです。これは、いわゆる芸術的な部分といいますか、「うちの楽団は、こういうオーケストラとして、こういう音楽活動を頑張っています」というようなことをお客さんに発表する場でもあると思います。

もうひとつは依頼公演といって、いわゆるお仕事をいただくようなかたちです。これは、楽団が出演料をいただいて、お仕事として演奏させていただくものなので、主

催者側さんがホールも押さえるし、宣伝もするし、いろいろな用途で公演を打って、私どもはそのうちの演奏を受け持つ代わりに、演奏に対するギャランティーをいただく。これは純粹にうちの楽団収入としてお金が入ってくる部分ですので、大事な収入源ですし、これがなければいま以上に厳しい状況になります。

Q 芸人さんでいう「営業」の活動ですね。しかし、そうしたものを広げていくためには、もっともっとクラシック音楽のファンを増やす努力も必要です。コアなファンだけでなく、一般の人にも親しみやすい「名曲」を集めたコンサートをどこのオーケストラでも企画しているようですが、センチュリーの場合はどうでしょうか。

【望月】 はい、それが「四季コンサート」で、年に4回ほど開いています。これは、みなさんがどこかで一度は聴いたことがあるような、本当に聴きやすい曲をピックアップして、3年前から始めました。会場はこれまでNHK 大阪ホールを使用していましたが、今年からいずみホールに変わりました。

定期演奏会に来てくださる方は、もともとクラシックがお好きな方、もしくはご自身が若い頃にサークル活動などで演奏されていた方など、すでにオーケストラの知識や経験がおありの方が多いのですが、そういう方々ばかりではいけない。この先、月日が経つとともに、いろいろと変わっていくでしょうから、新たなクラシック・ファンを少しでも開拓しなければいけない。その意味では、「やり方をもう少し変えるべきかな」と思ったりします。クラシック音楽の入り口的な扱いでやれるような公演を今後も考えて、新たなお客さん、とくに若

い方々に来ていただかないといけないと思っています。

うちのオーケストラはまだまだお役所的というか、いままでのお固いイメージから抜けきれていないというのが正直なところだと思いますが、来年度から飯森範親さんが音楽監督に就任します。飯森さんは、まだ若くて、すごくアクティブな方ですし、演奏会前には必ずプレトークをして、ファンの方々との集いも積極的に行われますので、来年度以降、センチュリーのカラーも少し変えることができるのではないかと思います。プログラムやパンフレットも含めて、もう少しイメージチェンジを図りたいと思っていますところです。

Q 大阪センチュリー交響楽団から日本センチュリー交響楽団と名称を変更したことにも今後への思いと期待が込められているのだと思いますが、地域的な広がりということも重要ではないでしょうか。

【望月】 名称が変わったこともありますが、やはり大阪だけで「事業」を展開していても、なかなか膨らみがありませんので、センチュリーという名前をもっと広範囲に知っていただくということもあって、大阪の周りの他府県で演奏会を積極的に開こうと考えています。その中で、関係ができたり、センチュリーを知っていただいたりすることを通して、ファンが増えていけば、それだけセンチュリーの存在意義も違ってくるとおもいます。現在は京都、滋賀、福井、三重で演奏会をやっていて、この「地方演奏会」も今年が3年目になります。

ただ、採算という面では、正直、厳しいです。とくに京都とびわ湖ホールは、うちの指揮者が関わりのある土地だということもあって、京都は今回で10回目を迎える

のですが、京都という土地柄もあるのか、やはり京響さん（京都市交響楽団）の牙城ですから、そこにうちが頑張っって乗り込んでいっても、なかなかびいてくれないというのが正直なところですよ。

びわ湖ホールさんは、オペラ公演となると地元の滋賀県・大津市以外からもたくさん来られますが、いわゆるクラシックのコンサートとなると、「わざわざ、びわ湖ホールまで行かなくても…」となってしまう。そういう点からしても、少し苦戦しているというのが正直なところですよ。

一方、福井や三重に関しては、そのホールさんが会員への細やかなケアをされていますので、うちがどうこうするというよりはホールさんがちゃんとお客さんにいろいろな案内をして、お客さんが来られるようなかたちがつくられています。お客さんがちゃんとそのホールに付いてらっしゃるので、ある程度は計算できるホールではありますね。

その意味では、もちろん土地柄もありますが、どんな活動をされているホールで演奏させていただけるかということも、内容としては非常に重要なと思います。ですから、一所懸命やられているホールさんと、今後も関係を構築していけることが、楽団にとっても大事なのかなと思います。

Q 西日本でも中・四国地方や九州の南部など、コンサートがほとんどなくて、ぜひ近くに遠征してきてほしいと願っているクラシック・ファンもいると思いますが、やはり愛好家人口という点でむずかしいのでしょうか。

【望月】 オーケストラ業界では、どのオケさんでも、四国という場所をなんとかしたいと思っています。現に大阪交響楽

団さんは、愛媛県松山市に支部を立ち上げて、営業活動を積極的にされているということも聞いています。実はうちも昨年、香川県高松市で演奏会を打たせていただきましたが、なかなかお客さんに来ていただけてなくて大変でした。神尾真由子さんという超一流のバイオリニストをソリストに迎えて遠征しましたが、「神尾さんでもこれだけしか入らないの？」という状況だったんです。それを考えても、やはりオーケストラを聴きたいと思われる人の絶対数がちょっと少ないのかなというのが正直な印象でした。

いわゆる「クラシックのコンサート」という仕立てで持っていくと、そういうことになってしまうのかなとは思いました。それよりも、もう少しファミリー・コンサート的な、たとえばテレビによく露出されているタレントさんのような方に司会をお願いするなどすれば、また違うのかもかもしれません。通常のクラシック・コンサートだと、小沢征爾さんのような世界的に有名な方が来ていただくというぐらいのものでないと、なかなか集まらないのかな…というのが正直な感想でした。今後は、もう少し違うやり方で地道にやっていく必要があるのかな、という気はしています。

（編集部注：観客の動員という点では苦戦した高松公演だが、この演奏会を聴いた複数の音楽ファンが、ブログにおいて、「今まであまた聞いてきた日本のオケのベスト5の中で、3本の指に入る演奏だったと思います」「いままで聴いたなかでも屈指の名演奏でした。…初めて聴きましたが、こんな素晴らしいオケだったとは…」と小泉和裕監督とセンチュリー交響楽団によるベートーヴェン交響曲第5番の演奏を絶賛する書き込みを行っている。）

より多くの人に音楽を

Q いい音楽をどう広めていくか、収支との両立で苦勞されているということですが、社会的責任の遂行ということでは、病院や支援学校（以前の養護学校）でもコンサートをされています。

【望月】 ちょうど本日から 1 週間やっていますが、最初のスタートは「タッチ・ジ・オーケストラ」という子どものプログラムを始めた翌年でした。その頃から、大阪府のオーケストラでありながら福祉や教育に楽団として何も携わっていないということがあったので、なんらかのかたちで府民の方々に還元できないか、あるいは、本当は音楽を聴きたいけれどもなかなか聴ける状況にない子どもたちのために何かできないか、ということで病院や支援学校でのコンサートを始めました。

支援学校でのコンサートは、いまは室内楽で回っていますが、最初は堺市にあるビッグ・アイ（国際障害者交流センター）に集まっていたいて、そこで約 1 時間のオーケストラのプログラムを組んでいました。ちなみにビッグ・アイは、すべてバリアフリーで、障害の有無を問わず利用でき、さまざまな事業をおこなっている施設です。

ビッグ・アイで支援学校コンサートをやっていく中で、「どうやら演奏会に来ることができるのは支援学校の中でも比較的元気な子どもたちで、病院と支援学校の往復しかできない子どもたちがけっこうたくさんいるらしい」というようなことがわかってきて、「それなら、そういう子どもたちにも少しでも音に触れてもらう機会を、なんとかしてつくるべきだよ」ということで、何年か後に、各支援学校に出向

いて、そこで室内楽のかたちで演奏するようになりました。

病院コンサートに関しては、ビッグ・アイでオーケストラを始めた年に、室内楽のかたちで始めましたが、当初は府立の比較的大きな病院でロビーコンサートをしようというものでした。患者さんやそこで働いてらっしゃる先生・看護師さんなども含めて、少しリラックスしていただく機会になればと考えたわけです。

いまは、府立病院だけでなく民間の病院でもやっていますし、うちは豊中市に本拠を置いていますので、豊中市民病院さんでもさせていただいています。去年は関西医大の枚方病院さん、今年は守口市にある守口生野記念病院さんでもやります。

病院によって、使えるスペースや時間帯などが違うので、その辺は話し合いながらやっていますが、患者さんがけっこう喜んでくださって、「来年もよろしくね」ということで、すごく楽しみにしてくださっています。

Q 他のオーケストラでも、小・中学校の音楽教育の一環を担ったりして、地域に存在する楽団としての社会貢献事業に力を入れています。実はオーケストラがある地域の人々は、クラシックのコアなファン以外でも相当数の人々が子供時代にはオーケストラに接しているということだと思います。今の日本では、クラシックよりも、それ以外のジャンルの音楽を愛好する人のほうがはるかに多いというのが実情でしょうが、そういう音楽でも今やほとんどが五線譜に記録されていると思います。そういう意味でも、あらゆる音楽の教養の基礎となるのが伝統的な西洋音楽であり、それがどんなものなのか、一度は実演に触れてみるのが重要ではないでしょうか。それで

ぐにクラシック音楽のファンになる子供なんてめったにいないでしょうが、そうであっても、単純に「プロの奏者が弾くバイオリンの音色って、こんなに綺麗なんだ」「コントラバスってこんなに大きな楽器なのか」というような実体験ができるだけでも、意味はあると思います。

【望月】 センチュリーでも、先に触れた「タッチ・ジ・オーケストラ」という体験教室を年に16回開催しています。これは、小学生を対象に、演奏を鑑賞するだけではなく、楽器に直接触れて音を出したり、オーケストラの中で演奏を聴いたり指揮をしたり、歌で共演したりと、オーケストラを体感してもらうコンサートです。

Q 子供たちには積極的に音楽に触れあってもらう機会をつくられているということですが、関西で開かれるクラシック・コンサートというと、率直に言って「聴衆は高齢者と女性ばかり」という印象があります。社会的責任という意味でも、新たなお客さんの確保という意味でも、もう少し働き盛りの男性にも来ていただくということを考えるべきじゃないかと思いますが、いかがでしょうか。クラシックのCDを購入する中心は中年の男性ですから、男でも決してクラシック音楽愛好者がいないわけではない、というよりも、ファンは大勢いるはずなのですが、おしなべて平日19時開演という開演時間が勤め人にはネックになっていると思います。

【望月】 平日開催の理由としては、第一に、ザ・シンフォニーホールは土・日が取れないということがあります。なぜかという、土・日の多くはザ・シンフォニーホールさんが主催公演をされていますし、うちより

ももっとザ・シンフォニーホールを借りているオーケストラに優先的に貸し出されますので、やむなく平日にせざるを得ないということです。

ただ、ザ・シンフォニーホールさんも、親会社が朝日放送さんから滋慶学園グループさんに変わられますので、そういう中で、今後は土・日に私どもも使わせていただけるようなことになるかもしれません。

たしかに中高年の男性は、開演時間ぎりぎりに駆け込んで来られる方がすごく多いですね。演奏会場で拝見していると、そう思います。大阪市内でも中心部に会社がある方でしたら、なんとか駆け込みで19時に間に合うという感じで来ていただける方もいらっしゃると思いますが、「もう少し遅いと絶対いいよな」とは思っています。

ところが、これもホールの事情に絡んでくるのですが、借りることができるのが夜22時までという決まりなので、それまでには完全撤収しなければいけない。その辺から変わっていけば、アレンジの仕方や考え方で、開演時間を少し遅らせるような可能性も出てきます。ホールが「23時までOKだよ」となれば、20時スタートのコンサートも十分にできる話になってきます。

そういうことを考えると、ヨーロッパもアメリカも、ホールにオーケストラが付属していて一元化されているケースが多いですね。たとえばボストン・シンフォニーにしても、オーケストラからホールやショップまで含めて全部が一つの経営体になっている。そういうかたちならば、横の連携によっていろいろな融通が利くと思います。日本でも京都市交響楽団は、京都コンサートホールと財団が一つになって、やってらっしゃいます。そうなれば、すべてが思うとおりに運ぶとは限らないでしょうが、ある程度、横の連携をとりながらやれる。

オーケストラにとってもホールにとっても、一体化しているというのが理想的だと思いますが、センチュリーはそうはなっていないということです。

オーケストラの「自立」は可能か

Q ぜひ、さらに参加しやすいコンサートのあり方を継続して検討していただきたいと思います。さて、ご説明いただいた主催公演である定期演奏会、四季コンサート、地方演奏会、病院や学校での演奏、そして依頼公演としての各種演奏会を合計すると、年間の演奏会の合計回数はどれくらいになるのでしょうか。

【望月】 すべて合わせると 95 回くらいだと思います。平均すると週 2 回くらい演奏して、もちろん、それ以外の時間は練習に充てています。

Q それでも黒字には程遠い。しかしこれは外国の超有名オーケストラであっても事情は同じで、経費の相当な部分を外部からの援助に頼っているということを聞きます。

【望月】 そうなんです。ベルリン・フィルにしても、もうケタが違います。大阪府がうちに、まだ独立する前に出していた補助金はだいたい 4 億円前後です。この金額をどのように感じられるかにもよりますが、日本のオーケストラでも、公共放送や東京の新聞社が傘下のオーケストラに補助している金額、もしくは京都市や東京都がそのオーケストラに出している金額と比べると、半額に近いぐらいの額です。つまり、他のオーケストラはもっと補助を受けてい

るわけです。それがベルリン・フィルぐらいになると、何十億円という金額が補助されているのが現状です。

アメリカの場合は、仕組みがまったく違って、本当に寄付社会の中で成り立っている部分もありますし、基金をたくさん積み上げていて、その何百億円の運用益で補助金に代わるぐらいの金額が十分に賄われている部分もあるので、一概には言えませんが、いずれにしても、億単位のお金が入ってきて、それで初めて収支が成り立つという状況です。

オーケストラの経営をチケット収入と寄付と自治体による公演助成（たとえば定期演奏会の開催に対する自治体からの補助金）で成り立たせようとする、どうしても自力の部分だけでは足りない部分が 30～40% ぐらい出てきて、それを寄付であったり、基金の運用益であったりで、補わなければなりません。その寄付者が民間だったり、自治体だったりという違いがありますが、収支の構造は世界的に共通しています。

Q 自分たちで可能な限り自立に向けて努力するのは当然だけれども、それでも世界トップクラスのオーケストラだって、運営経費の 7 割をまかなうのがやっとで、経費の 3 割くらいは外部に頼っている。クラシック音楽のオーケストラという形態である以上、現状では努力できることには限界があって、つまりどんなに成功しても、経費の 3 割はどこから手当てせざるを得ない。だとしたら、それをどこから持ってくるか。日本を代表するような東京の有名なオーケストラであれば、それは公共放送であったり、大手新聞社であったり、本拠地の自治体、つまり東京都ですね。

【望月】 関西では、京都のオーケストラが

京都市によって支えられています。

Q 人口ではイギリス第二の都市バーミンガムには、市営のオーケストラとコンサートホールがありますが、サイモン・ラトルという若き指揮者がこのオーケストラを鍛え上げて、世界的に有名なオーケストラに育て上げました。そして名声を得たラトルは、ベルリン・フィルの指揮者という世界の頂点ともいえる地位を勝ち取ったのですが、バーミンガムを訪れると、市や市民がそれをすごく誇りにしていることがひしひしと感じられます。

【望月】「おらがまちのオーケストラ」というような意識を市民の方がお持ちかどうかというのは、すごく大きいと思うんです。たとえば京都市交響楽団という存在に対して、京都の市民はすごく誇りを持ってしゃいますね。「京都には京響があるから」という意識をお持ちの方が多くのように思います。

市民が支えるオーケストラ

Q しかし大阪には、センチュリーのほかにもオーケストラがあります。そうすると、「自治体が支える」あるいは「税金が支える」という以外の方法も考えなければいけないでしょう。株主や社長の理解があるならば、「営利企業に支えてもらう」道もあるでしょうし、自治体を通さないけれども「市民が支える」ということも考えられるのではないのでしょうか。たとえば東京には8ないし10のプロ・オーケストラがありますが、そのうちのひとつ日本フィルハーモニー交響楽団は、映画「炎の第五楽章」で描かれたように、「労働組合の支援」によって支

えられてきたオーケストラですね。

【望月】日フィルもこのところ経営状態がすごく大変なようでした。私がセンチュリーに入る前に東京でフリーをしていたとき、いちばんお世話になったと言っても過言ではないオケでして、ヨーロッパ旅行にも一緒に連れて行っていただきましたし、九州の演奏旅行にも何年も一緒に行かせていただきました。その意味では、私自身がオーケストラの経験を積ませていただいた、本当に大事なオーケストラですので、すごく心配でした。公益財団法人になるためには、借金があるとだめなんですね。それを返す算段が整い、OKが出て、ちゃんと公益財団法人になれたと聞いたので、ちょっと安心です。

Q 日フィルを労組が支えたのと同じように、「生協など協同組合がひとつの中心となってオーケストラを支える」という道も考えられると思います。現にセンチュリー交響楽団に対しては、大阪府生協連、大阪いずみ市民生協、全労済大阪本部といった生協組織が組織的に支援しています。

【望月】はい、生協さんにはお世話になっております。たとえば、いずみ生協さんには、チケットの斡旋も含めて、いつもご協力いただいておりますし、そもそも大阪府生協連の津村明子前会長が大阪府の職員をされていた頃にちょうどセンチュリーが立ち上がった経緯がありますので、長きにわたってご心配をおかけしながら、ご協力いただいて、本当に感謝しています。私自身も、何度か直接お会いして、いろいろな相談に乗っていただいたり、橋下知事の一件で「センチュリーを応援する会」が立ち上がったときにも、加わっていただいたりし

て、本当にお世話になっています。賛助会員として各組織単位でご入会いただいたり、団体定期会員として演奏会にもお越しいただくかたちでご協力いただいたりして、本当にありがたく思っております。

生協さんは、すごく大きい組織でもありますから、組合員がたくさんいらっしゃいます。そこで、逆にセンチュリー交響楽団が生協に対してどんなことができるのかということも考えなければいけないと思っています。

実は2年前、日本センチュリーに名称変更したときに、「支援学校コンサート等、うちのボランティア活動的な部分に支援していただくかたちで、ボランティア協賛として100万円のご寄付をいただけませんか」というようなお話をしました。そのとき、ご理解を示してくださって、ご支援をいただいたのですが、ただ、今後はそれだけではいけないと、私はずっと思っていたんですね。生協さんがいろいろなかたちでセンチュリーをご支援くださることになったときに、それに対してセンチュリーはどんなことでお返しができるのか。それが明確に出てきて、生協さんとしても「生協がセンチュリーを支援することで、センチュリーからもこういうお返しがあって、生協自体の活動がよりよくなった」ということにならないと、長続きしない。うちばかりがご支援いただくばかりではいけないだろう。両方がウイン・ウインのかたちがつくれることで初めて持続可能になると、2年前からずっと思っていました。

生協さんには、いろいろな組織があり、いろいろな活動をされています。それをうちがどこまでケアできるのか。ひとかたまりにお集まりいただくことが可能なのか。イベントなどをされるときに、どのようなかたちでお手伝いできるのか。もう少し

突っ込んだところでお話しさせていただけると、よりお付き合いさせていただけるのではないかと思います。逆にセンチュリーをひとつのツールとしてお考えいただいて、活用していただきたいと考えています。

Q たとえば協同組合組織が映画を制作するときに、「音楽はセンチュリーさんに」となれば、ということですね。

【望月】 もう非常にありがたいお話です。

Q これまでは大阪センチュリー交響楽団でしたから大阪の生協が支えようということでしたが、いまや日本センチュリー交響楽団ですから、大阪以外の生協・協同組合組織とも、いい関係を結べたらいいですね。

【望月】 大阪府からの助成がなくなり、楽団を継続・発展させるために、新たな支援者を必死になって探しています。センチュリーにとっての本当の自立は、支援体制が整い、財産を減らさずに済む状態になったときだと思います。もちろん、「このような収入構造なので支援して下さい」と言ったところで支援者の心を動かすことは出来ません。芸術的価値や活動内容、楽団としての魅力がなければ、支援する気にも、演奏会に行く気にもならないと思います。まずは、他楽団との差別化を図り、センチュリーだけの事業を展開することが大切だと考えています。残された時間は少なく、険しい道のりですが、本当の自立に向けて精一杯頑張ってますので、これからのセンチュリーに注目していただき、ご支援賜りますようよろしくお願いいたします。